

無冠の帝王 学者 渡辺利夫の真実

今回は、作家を凌ぐような筆力をもつ経済学者の渡辺利夫氏（78歳）を追って、その作風、そして生き方などに焦点を絞ってみた。

激しい韓国論争

実は、渡辺利夫氏と筆者との関係は50年に及んでいる。それは、1967年の本誌創刊以来である。当時、学生気分の抜けていない渡辺青年は、本誌創刊号に「ハーリー・G・ジョンソンの低開発国経済政策に関する見解」と題する論文を投稿した。

当時、渡辺青年は本誌の編集方針などのアドバイザーであった関東学院大学の原覚天教授の門弟というか、いわゆる“カバン持ち”であった。

原教授は戦前の有名な満鉄調査部出身で、戦後は1958年に創設された（財）アジア経済研究所の調査部長から関東学院大学教授へ転身していた。当時の渡辺氏は、原教授の熱い「韓国研究」に引き込まれるように韓国に入り浸り、韓国語も学習して韓国研究に数年間没頭した。

また、同じ時期に原教授に薦められるままに援助問題にも首を突

っ込んだ。処女作は『低開発国経済援助論』で、アジア経済研究所の“アジアを見る目シリーズ”の一冊として出版された。渡辺青年の“アカデミズムへの入門”でもあった。

他方、親分の原教授は「韓国は面白い。日本の成し遂げたことなら韓国はきっと成し遂げるに違いない」と、李承晩時代の経済破たんを建て直すために、クーデターで政権掌握した朴正熙政権への期待は大きかった。

「とにかく、お前、韓国研究で一流になれ」と言われるままに、渡辺氏は韓国研究に没頭した。しかし、研究現場は一言で言うと荒れていた。日本の韓国研究者はもとより、韓国の研究者たちも一様にネガティブな韓国評価のオンパレード。「軍部独裁」、「財閥支配」、「従属経済」の3つをキーワード（決まり文句）にして、韓国批判を繰り広げていた。そこには「経済発展論」という見方、考え方などは存在していなかった。

しかし、渡辺氏はそうした研究に論戦を挑み、激しい論争の渦の中で、『現代韓国経済分析』（勁草書房）を書き上げる。その力点は、韓国の輸出志向工業化である。

そして、この工業化政策は、韓国に続く形で東南アジア諸国連合（ASEAN）、次いで中国の開発モデルになるという先駆的研究となった。

停滞アジア論への挑戦

筆者は渡辺氏の性格をよく知っているが、渡辺氏自ら「直感を理論化するタイプの間人だ」と話す。「ソウルへ行って繁華街に入ると、唸りを上げるような熱気に包まれていた。これを1カ月も経験して、直感的に必ず発展する国だと思うようになりましたよ」と現地での直感力を力説する。

さらにこう述べる。「財閥支配、軍部独裁、従属経済の韓国は発展しないという説はすべて間違いであった。『現代韓国経済分析』が自分でも誇れる論文だと思ったのは、“従属からの自立”という概念ゆえであった」という。これが、1985年には『成長のアジア 停滞のアジア』（講談社学術文庫）という形で出版され、吉野作造賞を受賞する。

ご本人は、「あれは総合雑誌に掲載された論文コレクションだ」と言うが、筆者は当時、アカデミ

ズムの世界で大活躍していた元・京都大学教授の矢野暢氏たちの停滞アジア論を論理的に打ち破る快挙だったと思っている。

そこで筆者は、これまでの歩みを「渡辺ライフワークの第1ステージ」と勝手に設定してみた。

その第1ステージでは、著書の傾向からみると、『成長のアジア 停滞のアジア』に続いて『開発経済学』（日本評論社、大平正芳記念賞）、そして『西太平洋の時代』（文藝春秋、アジア太平洋賞大賞）などがあり、それらは主にアジア地域の経済開発論の主流を形成していった。

ちなみに、渡辺氏のドクター論文は『開発経済学研究—輸出と国民経済形成』で、慶應義塾大学大学院修了後10年間の努力の集大成であった。

わが道を行く

それでは、次に「渡辺ライフワークの第2ステージ」に入ってみよう。

筆者は、渡辺氏との長い付き合いから、他の学者に比べて、学者としては慶應出身だからと言ってそのスクールに属さず、さりとして、アジア経済研究所などのスクールにも属さない独特な歩みをしてきたと見ている。渡辺氏には、かつては原覚天というボスがいたけれど、それは「学問的ボス」というより「人間的ボス」であったと言っても過言ではない。

渡辺氏の学者としてのステージにはボス的存在の学者は見当たらない。「独り、自分の世界を行

く」という人生観がにじみ出ている。

だが、自分の学問、考え方を広く世間に知らしめ、多くの人びとを自分の共鳴者として増やしていくという意味で、実に多くの有力な新聞、出版社に太い人脈を形成して、その中で自分の主張、考え方を論じてきた。

また、渡辺氏の著作を読んで学者や研究者になった人も多いことを、私はよく知っている。

言論人は、多くの読者を背景に、政治権力などと闘いながら世に警鐘を鳴らす役割を負っている。その存在は「無冠の帝王」と言われる。その意味で、渡辺氏は学界における「無冠の帝王」と言ってもよいだろう。

さて、周知のことと思うが、経済学にも流行があって、渡辺氏の青春時代は“数学の時代”であった。「当時の三田学会雑誌などをみると、最初から終わりのページまで数式がただ並んでいるだけで、何のことやら、こんなことで経済がわかるのか、と疑いたくなる。その上、経済学を含め、学問の専門化、細分化が進む一方であった」と語る。



渡辺 利夫氏

神経症の時代へ

ここで、渡辺氏にご登場願ひ、当時の心境を語ってもらった。

「やっぱり、一番関心のあるのは人間でしたね。人間というのはマイクロコスモス（小さな宇宙）であって、いろいろな価値、欲求、情念など、ありとあらゆる要素から成り立っている。しかし、経済学では人間は経済的動物であるということを前提に、人間が持っている諸価値のなかで経済的価値のみを重んじる。こういう、そもそも存在し得ない人間類型を想定して、その行動パターンを理論化しようということなんじゃないかな。私は、そういう経済学にだんだん関心がなくなっていました」。

つまり、少しずつ、いわゆる純粋な定形的な経済学なるものから

離反していくのである。その離反の最中の1996年に、「あるがままに生きる」をテーマにした『神経症の時代』（TBSプリタニカ）を書くことになった。これが開高健賞の正賞に輝いた。渡辺氏は学問の世界（仮説の世界）に失望感を抱くようになる。

その頃の執筆傾向を見ると、人間の生き様に焦点を当てたような作品を書き始めている。その典型が、自分の心情をある俳人の人生に仮託した『種田山頭火の死生一ほろほろほろびゆく』（文春新書）で、人間存在の不可思議さの根源を求め始める。

こうした傾向について、ボソッとこう語った。「私はアカデミズムの世界で、私は私なりの仕事をしてきたとは思うんですけども、失望の方が多かったと思うんですよ」。

高まる文学への関心

そこで筆者が『神経症の時代』



若かり頃の渡辺利夫氏(右)と原覚天先生(=渡辺氏提供)

はそうした考えの反動なのか、と尋ねると、「文学でなければ人間の内面には入れないし、人間の集まっている社会とは何であるかもわからない。やはり形式としては文学ではないかと考え始めたんでしょね」、「例えば、美と醜、聖と俗の双方を徹底的に理解しないと、美なるものも聖なるものもわからないと思ひ始めたんですね」。

さらに、「最近、歴史に関心を寄せて、戦争の歴史を勉強していますが、戦争が何であるかをわからなければ平和はわからない。悪を知らずして善はわからない。こうして自分を振り返ってみると、やはり経済学では飽き足らなくなってきたと思うようになったんでしょね」。

思い起こすと、渡辺氏（筆者も同じだが）の時代は、左翼リベリズムが圧倒的な力をもっていた。朝日新聞や岩波書店が元気で、大学では慶應義塾さえもマルクス経済学が元気だった。他大学も推して知るべき状況だった。

マルクスの発展段階論、そして、その背後にはヘーゲルの段階論があって、人間社会は進歩するものだという、いわゆる進歩史観であった。

渡辺氏は、ある時期からこうした考え方を疑うようになる。

「人間社会は進歩しない。進歩しているのは社会の表層である“技術”だけである。技術の進歩を見ていると、いかにも社会が進歩しているように見えるけど、人間自身の喜びと悲しみ、幸福と不幸、歓喜と絶望は、自分の親たちや先祖と同じだと考え始めた」と語る。

渡辺氏は、こうした人間の循環史観が深まるにつれて、歴史に関心をもち始める。歴史の中にこそ人間の生き様が描かれている。

「僕は人間を見ていると、決して古い時代が現代に比べて遅れているとは思えない。技術は進歩しているけど、人間自身は変わらない」と主張する。

福澤諭吉の真実

さらに渡辺氏は、「歴史を学ぶことの意味は、その時代の環境条件が変化した時に、指導者や庶民はどのような行動をとればよいのかを確認するための知恵を得ることにあります。現在の私たちの悩みごとは、例えば100年以上も前の福澤諭吉の言説の中に提示されているのではないかと力説する。

そして、「歴史というものは、歴史家だけにまかせていいものではない。特に近代史ですね。日本の学問の中で、近代史はある意味

で非常に遅れている分野です。当時の原資料の資料公開があっても、左翼リベリズムの観点からなされる歴史的判断はみんな似たりよったりです。

左翼リベラリストにとっては、隠されたものの中から真実が発見されると都合が悪いのではないかとさえ思います」と指摘は鋭い。

「例えば、福澤諭吉を生涯にわたって研究している人が、『学問のすすめ』の数編と福翁自伝の思想でしか福澤を論じていない。後年の福澤は私からみればラディカルなほどに思想を変化させているのですが、そんなことはほとんど無視されている」、と近代史への一部の学者たちの矛盾を突く。

既存の福澤研究者は、自分の左翼的リベラルな思想の淵源が、福澤という権威の中にあるという、ある種の権威主義に陥っているのではないかと強調する。あの一万円札の肖像に現れているような福澤を自分の権威付けに使いたいという意識が無意識的に働いているという。

人間存在の不可思議

渡辺氏は、2016年に『士魂—福澤諭吉の真実』（海竜社）という力作を発表して、第9章で、「福澤思想変遷と体系—激動期を生きた福澤の言説に学ぶ」、で締めくくっている。

その中では、『学問のすすめ』、『文明論之概略』、『丁丑公論』、『通俗国権論』、『時事小言』、『時事新報』、『脱亜論』、『瘠我慢之説』、『日本と英国との同



ベトナム・ハノイの道路。交通渋滞が慢性化する中、都市鉄道など交通インフラの整備が進んでいる

盟』などの考え方、主張を鮮明に描き出している。

こういう精神的な領域に入ってくると、経済学などの領域を超越してしまう。渡辺氏は、1996年に「あるがままに生きよ」という森田療法を描いた『神経症の時代』を、実に見事に書き切った。「時代に対する私のアンチテーゼだ」と語っている。だが、社会を構成する一人ひとりの人間に視点を当てて、教育の在り方、社会の在り方、国家の在り方など見つめてきた。

さらに、歴史（特に近代史）から人間の在り方、そして社会、国家の在り方を洞察したいという動機が、福澤諭吉の研究、そして人間存在の不可思議について『放哉と山頭火—死を生きる』（ちくま文庫）にまで視野の領域を広げている。ある意味で時代に腕く（もがく）一人の学者の姿が見えてくる。

総括してみると、1996年の

『神経症の時代』、『種田山頭火の死生』以降の第2ステージでは、渡辺氏は確かに「経済学」を捨てている。そして、第2ステージではむしろ、人間と国家の有り様を探求する論調へと変化している。

『新脱亜論』（文春新書）、『中国は歴史に復讐される』（育鵬社、岡崎久彦氏との対談）、『君、國を捨つるなかれ』（海竜社）、『国家覚醒』（海竜社）、『日本の活路』（海竜社、三浦朱門氏との対談）、『放哉と山頭火—死を生きる』、『士魂—福澤諭吉の真実』、『アジアを救った近代日本史講義』（PHP新書）など。

次は「人生の第3ステージ」であるが、実は、すでに第2ステージの中には第3ステージを予感できるような作風が散見できる。だから、もうすでに渡辺氏の第3のステージが始まっているかもしれない。それが何か。「種あかし」を近々やってくれるそうだ。